

第 16 回 大賞(金の星賞)受賞作品

「弱虫鬼ごっこ」

岩手県立水沢高校三年 佐藤 綾香



賢 治 の ま ち か ら
全国高校生★童話大賞



大賞 〈金の星賞〉

『弱虫鬼(じつこ)』

岩手県立水沢高等学校三年 佐藤 綾香

「理人(あやと)は優しい子だねえ」

友人にからかわれ、いじめられて泣いていた僕を、おばあちゃんはいつもそう言って抱きしめてくれた。

「違うよ。いじめられても何も言い返せない、ただの弱虫だよ」

「ううん、理人は優しいよ。だっていじめっ子の悪口は言わないだろう？ 悪口を言ったら、お前もいじめっ子と同じだからね」

そう言って美鈴おばあちゃんは優しく頭をなでてくれた。僕は、そんなおばあちゃんが大好きだった。でも、何も言い返せず、おばあちゃんになぐさめてもらうことしかできない自分が一番嫌いだった。

「よし、この前の続きを聞かせてやろう。たしか、人に化けていたずらをする狐の話だったかな」

「そうそう。それで狐は最後、どうなっちゃったの？」

「じゃあさっそく続きを話そうじゃないか。人に化けて悪さをした狐はねー」

おばあちゃんは幽霊や妖怪などが登場する不思議な話に詳しく、よくこうして話を聞かせてくれた。幽霊や妖怪が見える、と話したこともあったが、お母さんやおじいちゃんは「適当なことを言っているだけだ」とか「昔から不思議な人だった」と笑っていた。でも、本当に見えているんじゃないか、って思っていた。

こうして僕、大内理人ははたから見たらオカルトマニアな小学四年生になった。弱虫なのは相変わらずだけど、いじめられることはなくなったため友達も増えた。おかげで平和な毎日を過ごすことができ、今日もいつも通り学校へ向かっていた。すると突然、後ろから誰かが僕の肩にぶつかってくる。

「弱虫じゃま、どけろ」



ただ一人、今でも苦手な保育園の頃から一緒の真鍋光君だ。彼だけは今も僕のことを嫌いみたいで、いじめてくることはなかったものごうして突っかかってくるが多かったし、何より名前ではなく「弱虫」としか呼んでくれない。弱虫を治せない僕は、できれば光君とも仲良くしたいのにな、と苦笑いを浮かべることしかできなかった。

「ご、ごめんね。一緒に歩いてもいい？」

「嫌だ。弱虫は足も遅いからな」

光君はそう言って走り出してしまった。僕は足が遅いので、足が速い光君には追いつけない。仕方ない、とその様子を眺めていると、段差につまづいてしまったのか光君は思い切り転んでしまった。

いや、そのはずだった。

ゆっくりと起き上がりふと前を見た光君は、その先の光景に驚いている。僕もまた、その先の光景に目を奪われていた。

転んでしまったはずの光君が、その先を走っていた。見間違いかと思っただけ、ランドセルも、服装も、光君そのものだった。

僕はあわてて光君のそばに駆け寄った。光君はぼうぜんとしたまま、「光君」が走っていった方を見つめていた。

「なあ、今、何が起こったんだ？」

僕は分からない、と首を横に振る。実際、「光君」はすぐにいなくなってしまうため会話することができない。すっかりしなまま、僕たちは学校へ向かった。

学校に着くと、教室にはすでに「光君」がいて、クラスメイトと話をしていた。まるで自分が本物の光君であると思せびらかしているかのようだった。

「……ふざけんよ」

光君の声は震えていた。そのまま教室の中に飛び込もうとしたのを、あわてておさえこむ。

「何で止めるんだよ。あいつをどうにかしないとイケないのに……」

「だめだよ、今行ったら大騒ぎになっちゃう」



光君は不満げにこちらを見てきたが、仕方ないとしぶしぶあきらめてくれた。そして、姿を見られないようにひとまずトイレの個室に隠れることにした。

「何で俺が二人いるんだよ。こんなの絶対ありえないはずだ」

「僕も信じられないけど……少なくともこれは夢じゃないし、多分僕たちだけでどうこうできるものでもないよ」

「弱虫のくせに冷静だな。何か解決策でもあんのか？」

僕は光君の目を見てうなずく。実は、このことを解決してくれそうな人はすでに思いついていた。

「僕のおばあちゃんのところに行こう。おばあちゃんはこういう不思議な話に詳しいから、もしかしたら何か知ってるかも」

「……分かった。お前に助けられるのは気に入らないけど、今頼れるのはお前だけだからな」

光君はさっさと行くぞ、と歩き始めた。嫌われている僕の言うことなんて聞いちゃくれないかと思っただけに、光君の反応に驚きを隠せなかった。僕はうん、とうなずきながら光君の後に続いた。

小学校からこっそりと抜け出し、十五分くらい歩いた先にあるおばあちゃんの家は無事辿り着くことができた。僕だけさぼりになってしまうのでお母さんに怒られそうで怖いけど、今はそのことは忘れるしかない。

チャイムを鳴らそうと手を伸ばすと、庭の方からおばあちゃんの声が聞こえてきた。ちようど良かった、とそちらの方へ向かう。

「おばあちゃん！」

「あら、理人じゃないか。それとお友達かな。学校はどうしたんだい？」

おばあちゃんは洗濯物が干してある小さな庭の縁側に座っていた。しかし、不思議なことに話し相手はいなかった。

「あれ、おばあちゃん、誰かと話してなかった？」

おばあちゃんはきょとんとして一瞬視線をそらし、ああ、と何かを思い出したような表情を浮かべた。

「気のせいじゃないかい？　ひとまず、ここに座りなさい」



おばあちゃんはそう言って自分の右隣に座布団を二枚敷いた。不思議に思いつつもそこに座る。

「それで、どうしてここに来たんだい？ 今は学校の時間のはずだろう」

「あのね、光君が転んだら、突然もう一人光君が現れたんだ。しかも、教室で他の友達と話をしていたんだ。それで、こういう不思議な話ならおばあちゃん何か知ってるんじゃないかなって」

「そこまで一気に話すと、おばあちゃんは少し悩んでいるような表情を浮かべる。」

「あいにくだけど、そういつた話は聞いたことないねえ」

「そっか、と二人で落ち込んでいると、」

「ただ、解決できないわけじゃない。……理人、おばあちゃんの手を握ってくれるかい」

とおばあちゃんは手を差し出してきた。何だろうと思いつつその手を握ってみる。

その時、空気がピリツと張り詰めたような気がした。そして、目の前に「何か」が現れ、思わず叫び声を上げてしまった。

そこには鬼がいたのだ。

いかつい顔、頭に生えた角、僕よりもずっと大きな体、そして、右手に持っている金棒。どこからどう見ても、間違いない鬼だった。

僕はとっさに光君の手を握ってしまった。

「おい何してんだよ気持ち悪いな……うわあああ！」

「どうやら光君にも、鬼の姿が見えるようになったらしく、驚きの声をあげていた。」

「ご紹介するわね。こちら、この町に住んでいる鬼吉さん」

「鬼吉だ。よろしくな」

僕たちはとまどいつつも続いて自己紹介をする。おばあちゃんは本当に妖怪が見えていたんだ、と僕はただただ驚いていた。

「おい美鈴、突然見せたらびっくりするだろ。もっと気をつかってやれ」

「確かに何の説明もなしに見せるのは良くなかったわね。ごめんね、二人とも」



僕は気にしないで、と返事する。実のところ、今までは物語やおばあちゃんの話の中にしか存在しなかった鬼が目の前にいることにわくわくしていた。「ん？ おい光とかいったか、お前影がないぞ」

鬼吉さんは金棒を光君に向けながらそう言った。光君の周辺を見てみると、確かに影がない、ということに気が付いた。

「さっきの話から考えるに、こりゃ多分『影踏み鬼』の仕業しわざだな」
「影踏み鬼？」

「ああ、あいつはよく人間にちよっかいをかける鬼でな。ときどき人の影に潜り込んで転ばせ、そいつの姿になって遊ぶんだ。今、光に影がないのは影踏み鬼が実体化しているせいだな」

「どうすれば元に戻せるんですか？」

今朝けさからいろいろなことが起こっていたせいか、不思議なことにすんなりとその話を受け入れていた。

「光が影踏み鬼の影を踏むだけでいい。一番影が伸びる夕方がチャンスだ」
思ったよりも簡単そうな方法だったので、ほっとため息をついた。光君の表情も安心しているように見えた。

「ただ少々問題があつてな。奴は本物よりもすばしっこいんだ。頭を使わないとすぐには捕まえられんだろうな。それと、一人でやらないと理人、お前めづが狙ねらわれる可能性もある」

その言葉で、再度頭を悩ませるはめになった。僕は足が遅いから狙われたらすぐに捕まってしまうだろう。しかし、足の速い光君でさえ転ばされてしまったのだ。光君だけで影踏み鬼を捕まえられるとはとても思えない。

「鬼吉さんは手伝ってくれないのかい？」

「すまない。こういう現象には助言しかできないのがルールになっているんだ」

鬼吉さんは申し訳なさそうな表情をうかべたあと、今度は真剣な表情で僕の方を向いた。

「……訳ありと言えば、お前らの仲もそうみたいじゃないか。二人の仲はあまり良くないように感じる」

僕たちはぎくっとう肩を震わせた。鬼吉さんにはそんなことまで分かっつまうのか、と感動と共に恐怖も覚えた。



「俺としては理人が光を助ける理由もないと思うんだよな。無理する必要はないんだぞ」

鬼吉さんのその言葉に光君の顔から血の気が引いていくのが分かった。光君から一方的に嫌きらっているのだからそうなるのも当然だろう。

それに、僕には光君を助けるメリットはないし、むしろ危険に自分から突っ込むことになる。そう考えると、僕は光君を助けるのが怖くなってきた。

ああ、結局僕は弱虫なんだな、と情けなくなってくる。

「理人、惑まどわされるんじゃないよ」

おばあちゃんの凜りんとした声はその場に響き渡った。

「でも、僕は弱虫だから、怖こわいんだ」

「理人は優しい子だろう？ その優しさが勇気につながるはずさ。おばあちゃんは、信じているよ」

今度は昔、慰めてくれた時のような優しい声で語りかけてきた。その声で落ち着きを取り戻し、僕は改めて考えた。

僕が狙われるかもしれないのは、確かに怖い。でも、ここで光君を見捨ててしまったら後悔するような気がするし、いつまでも、「弱虫」のレッテルを貼はられたままではいけないと、そう思った。

「……僕は光君の助けになりたい」

僕ははっきりとした口調で、光君に向かって言った。

「本当にいいの？ 俺は今までお前をつっぱねてきたんだぞ」

光君は不安そうに尋ねてくる。

「いいんだよ。ここで逃げたらかっこわるいしね。それに僕ね、光君と友達になりたいんだ」

僕はにこっと笑いかけた。すると光君は目を見開き、そっぽを向いた後、小さくありがとう、と呟つぶやいた。

「全く、余計なことを吹き込んだじゃって」

おばあちゃんが鬼吉さんに文句を呟いた。

「がはは、なに、覚悟があるか試したのさ。でもま、その様子なら大丈夫だろうな。お詫びに一つ、奴の弱点を教えてやる」

鬼吉さんは豪快に笑って続けた。



賢治のまちから 高校生☆生活大賞

「あいつはそんなに頭が良くないから、はさみうちなんかされたり、行き止まりに追いこまれたら困るだろうな。普段はここまで言わないからな、サービスだ」

僕たちはありがとございませう、と鬼吉さんに向かってお辞儀じぎをする。頑張れよ、と優しい声をかけてくれた。そしてそのまま、鬼吉さんは住んでいる山へ帰っていった。僕たちは夕方までおばあちゃんちで作戦会議をしながら待つことにした。

そして夕方。いよいよ作戦実行だ。影踏み鬼はどうやら一人で下校しているようなので、捕まえるには絶好のチャンスだった。

「ひ、光君、ちょっといいかな？」

僕は意を決して影踏み鬼に話しかけた。

「理人、どうしたんだ。お前、学校に来なかっただろ」

僕のことを理人、と呼んだので、ああ、本当にニセモノなんだなあと改めて実感した。どうやら完璧かんぺきになりきることはできないらしい。

「うん、あのね……」

そこまで言いかけたところで急に怖くなってしまい、黙ってしまった。これから戦うのは人間じゃなくて鬼だ、と思うとうまく体が動かない。でも光君を助けなきゃ、僕が頑張らなくちゃ、と言い聞かせ、僕はがっしりと光君をおさえこんだ。その瞬間、近くの電柱の陰に隠れていた光君が影踏み鬼の影めがけて走ってくる。

「光君の影に戻ってほしいんだ！」

そう言った瞬間、影踏み鬼に振りほどかれ、僕は尻もちをついてしまった。

影踏み鬼はすかさずその場から走り出す。

「ちっ、もう仕掛けてきやがったか。でも、この俺に追いつくことができるかな？」

影踏み鬼はけたけたと笑いながら走っていく。僕たちも後を追って走り出した。

影踏み鬼は公園のグラウンド側に逃げ込んだ。入ってすぐにごちらを振り返り、僕を指差す。

「お前、気に入くわない。今度はお前になってやるよ」



そう言って僕めがけて走ってきた。当然僕は逃げ始める。こみあげてくる恐怖を抑えながら、どうにか影を自分の後ろに伸ばさないように方向を変えつつ、追いつかれないように全力で走るのは大変だった。

しかし、影踏み鬼の方が足が速いため、すぐに追いつかれ、左肩をつかまれてしまう。そこはグラウンドのすみっこにある水飲み場の近くだった。影は、そちらの方に伸びている。

「おとなしくしてろよ。すぐに影を踏んでやるから」

影踏み鬼は相変わらずけたけたと笑っている。僕はその様子がおかしくて、思わず笑ってしまう。

「気味が悪いな。どうして笑っている？」

「だっておかしいんだもん。僕らにはめられていることに気付いてないんだから！」

僕は一步、左側へ移動した。その瞬間、影踏み鬼の影が水飲み場の方へ伸びていく。そして、水飲み場の陰から光君が飛び出した。

「しまったー！」

影踏み鬼は慌てて後ろに逃げ出すが、その影は無防備にさらされていた。そして、光君はすぐにその影に追いつき、力強く踏みしめた。

「——捕まえた！」

影踏み鬼は悲鳴を上げながら、地面に吸い込まれていく。やがて完全に吸い込まれ、光君の足元には長い影が伸びていた。

「これで、大丈夫なのかな？」

僕は疲れと安心からその場にへたれこんだ。光君も疲れているようだったが、安心してしているような、やりきったような、そんな表情だった。

「ありがとうな。その、まあ、少しは見直したよ。……理人」

最後の方は消えそうなほど小さな声だった。僕は思わず目を見開く。

「えっ今、名前で呼んでくれた？もしかしてまだ影踏み鬼が……？」

「ああもううるさいな！何でもいいだろ！」

光君はそのまま公園の出口へと向かっていく。今度は置いて行かれないように、光君の後を追いかけた。



それからというもの、一度不思議な現象に触れてしまったからなのか、ときどき幽霊や妖怪が見えるようになってしまった。おばあちゃんや鬼吉さんにむやみにそういうものに関わるな、と言われていたが、もし友達になれるならなってみたいな、と思う。

もう一つ、変わったことがある。光君に弱虫と呼ばれなくなったこと。そして、前よりも仲良くなれたこと。

今日も、おばあちゃんと鬼吉さんに話を聞きに行くために、光君と影踏み鬼を捕まえた公園で待ち合わせをしていた。

「おまたせ、待った？」

「いや、待ってはいない。いないんだけどな」

光君はそう言うのと足元を指差す。何だろうと思いつつその方向を見ると、光君の影から黒くて丸い何かが飛び出していた。

「よ。あんときは世話になったな」

「もしかして、影踏み鬼？」

その黒いものはこぐりとうなずく。

「さすがにもう乗っ取りはしないけどな、こっちもやられてるばっかじゃ悔しいから、こいつの影に住むことにしたわ。まあ、よろしくな」

「よろしくじゃない、こっちは迷惑なんだ。鬼吉さんに追いつけてもらうからな」

僕は目を丸くして光君と影踏み鬼の言い合いを眺めていたが、何だかんだんと笑いがこみあげてきた。

「……ぷっ！ あははははは！」

「何だよ、笑ってんじゃねえよ……ぷぷっ、はははっ」

いつのまにか、影踏み鬼も含めて三人で笑いあっていた。

こんな不思議な出来事がこれからも続くのかなと胸をおどらせながら、僕たちはおばあちゃんちへと向かうのだった。